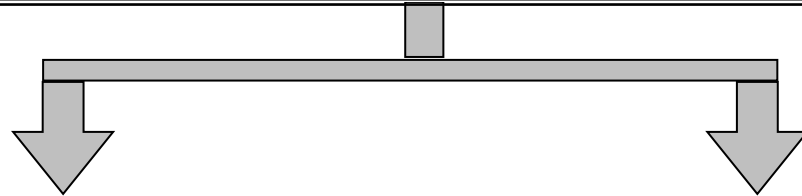


生き方部会

I. 研究の概要

研究課題

「子どもたちが自己を見つめ、互いに認め合う心を育む教育はどうあるべきか。」



【研究内容1】

互いに思いあう心を育む
ボランティア教育の実践

- ア. ボランティア
- イ. 福祉
- ウ. ボランティア体験

【研究内容2】

自己実現を支援し、自他の生命
を尊重する教育のあり方

- ア. コミュニケーション
- イ. カウンセリング

研究方法

(1) 交流計画

研究内容の領域ごとに2つの分科会に分け、各分科会で討議実践交流・意見交流を行う。

(2) 分科会構成

- ① ボランティア教育分科会
- ② コミュニケーション分科会

(3) 研究協議会の内容・方法

南北合同開催での研究協議会をもつ。今年度は、ボランティア分科会は大森中学校、コミュニケーション分科会は江別市民会館を会場として行う。2つの分科会でそれぞれに実践発表や講演、レポート交流などを行う。

II. 実践研究の経過と成果

1. 実践研究の経過

(1) 部会役員研修会による研究経過

- 5月 8日 第1回役員研修会、合同役員研修会
今年度の研究計画の概要確認
- 5月 16日 第2回役員研修会
研究協議会分科会協議内容についての話し合い
- 7月 3日 第3回役員研修会
研究協議会事前研修（コミュニケーション）
- 7月 24日 第4回役員研修会
研究協議会事前研修（ボランティア）
- 8月 16日 第5回役員研修会（拡大役員研修会）
研究協議会運営について、分科会運営について
- 9月 5日 石教研課題部会研究協議会
分科会形式による研究協議
- 9月 15日 第6回役員研修会
研究協議会の反省、研究の成果・課題のまとめ
- 10月 19日 第7回役員研修会
次年度研究計画についての話し合い

(2) 部会役員研修会での研究成果

- ・課題解明に迫るための手段として、新しい知識を得ることが重要と考え、体験・講演を行うこととし、1年次目の研究を進めることができた。
- ・講師の方を交え事前研修を行うことで、当日の研究協議についてより具体的に運営方針を立てることができた。

2. 課題部会研究協議会での交流

(1) 第1分科会 ボランティア教育

①実践交流の様子

NPO 法人セカンドサポートとナマラ北海道から芳賀博信氏と戸澤文広氏ら講師8名をお招きし、大麻中学校体育館でブラインドサッカーの研修を行った。

ブラインドサッカーでは、フィールドプレイヤーはアイマスクを着用しなければならない。そのため、音の鳴る特別なボールを使用すること、ガイド（コーラー）と呼ばれる指示を出す人が存在することが大きな特徴となっている。研修では、フィールドプレイヤー役とガイド役を交互に体験したため、どうやったら相手により伝わるのかを深く考える機会となった。

具体的に研修内容を紹介すると、まずは2人1組でアイマスク、ガイド体験を行った。ガイドする人の位置が前なのか、後ろなのか、手を放しているのかで心理的に全く違うことが理解できる体験であった。また、体育館を歩き回る約60人の声がさまざまな方向から聞こえてくると、周りの歩いている人との位置関係を把握しづらいことがよくわかる体験でもあった。



次に、アイマスクをつけて6～7m離れた地点にまっすぐ歩く体験を行った。周りのガイドの指示が大切であるが、講師から『指示は「あと少し」ではわからない。もっと具体的に。何歩？何cm？』とのアドバイスをいただくと、少しずつ正確な位置へ導けるようになった。走ることにチャレンジしたが、格段に恐怖心が増すので、ガイドとの信頼関係が大切になると実感できた。



最後に、転がると音の出るボールとアイマスクを使用して、ドリブル、手で転がして対面パス（2人ともアイマスク使用）、足で対面パスを行った。一度アイマスクをするプレーヤーからボールが離れると、ボールの位置を把握し直して、足でコントロールするまでには大変時間がかかる。ガイドがプレーヤーに「右にあと1歩」と指示した場合、うまくコントロールできる場合もあれば、逆に動かした右足に当たって再び転がっていく場合もある。ガイドは相手の歩く様子を見て、指示の出し方を変えなければならないし、プレーヤーもガイドの指示の内容だけでなく声の様子などを感じ取ってさじ加減を決める必要がある。まさに「お互いのことを思い合う」体験的な研修となった。

② 成果と課題

今回の体験を踏まえ、各校で実践した内容をレポートにまとめ、交流して学習を深めることが来年度の課題である。「児童生徒にどのように還元していくか」については、毎年、議論が交わされている。今年度、視覚障害体験だけでなくガイド体験をしたことで、教師が意図的に「相手のことを互いに思いやらなければならない」状況を作り出せば、有意義な体験活動を児童生徒にさせられそうだと感じることができた。協議会後のアンケートを見ると、「もっとパラスポーツについて知りたい、体験してみたい」「実際に視覚障害を持った方と交流したい」という方もおり、多様な内容でレポート交流が行えるのではないかと期待しているところである。

(2) 第2分科会 コミュニケーション

① 実践交流の様子

スクールカウンセラーの中野ひろみ氏をお招きし、カウンセリングにおいて効果的な要素について学んだあと、3名ずつの小グループに分かれて、「リソース探し」「タイムマシニングエスチョン」を体験しながら交流した。

「リソース探し」

1. 4～5人のグループに分かれて座る。
2. リーダーは、リソース、リソース探しの意義を説明する。
3. グループで1人1つずつ、順番に発表する。時間を明確に決める。
(・約束として、聞いている人は必ず拍手をすること。)
(・発表内容は、その時に思いついたもので良い。)
4. 時間になったら止め、各自の感想を記入する。
5. 小グループでシェアリング。グループ内で、各自が書いた感想を順番に発表する。
6. クラスでシェアリング。グループ代表が、自分の感想を発表する。



エンカウンターの中の1つであり、小学生の卒業時に行うことが多い。エンカウンターは強制参加ではないため、参加しないという選択も可能である。

また、内省は、個人→小集団→全体と広げていくことが望ましい。

「タイムマシクエスチョン」

T 「タイムマシンに乗って、○年後の世界を見に行ってみよう！」

- ・何をしている？ →○○年△月△日×時×分くらいと明確に提示すると良い。
- ・誰と？
- ・どこで？
- ・どういう場面？
- ・どんな表情？

T 「5年後のあなたが、今のあなたに気がついて、何かメッセージを残したみたいです。何と言っていると思いますか？」 →今自分が言われたいメッセージであることが多い。

T 「では、そろそろ2017年の世界に戻ってこようか。」

何年後に設定するかの効果はそれぞれであるが、バイアスから解放された頃が良い場合が多い。例えば、中学生であれば、卒業後など。

目を閉じながら行くと、一種の催眠状態になるため、行う時は壁をスクリーンと見立てて行うことが望ましい。

②成果と課題

今回の交流では、カウンセリングの中で用いる手法の一つとして「リソース探し」「タイムマシクエスチョン」のグループワークに取り組んだ。成果として、次の2点があげられる。

まず1点目に、教員が、児童・生徒のリソースを積極的に探し、フィードバックしていくことの重要性を再度確認することができた。何か問題が起きたとき、問題の原因を明らかにすることの他に、問題ではなく、持っている力を明らかにしていく未来志向型のアプローチも大切であると感じた。

2点目に、問題を抱える児童・生徒だけではなく、学級もしくは学校全体で取り組める内容であり、部会員が、すぐに実践したいと感じられた点である。それぞれが、目の前にいる生徒のことを思い浮かべながらグループワークに参加し、積極的に質問する様子も見受けられた。

次年度のレポート交流に向けて、各学校で積極的に取り組み、有意義な実践交流ができることを期待している。



Ⅲ. 講演会（実技・理論研修会）

1. 第1分科会 ボランティア教育

NPO 法人セカンドサポートとナマーラ北海道から芳賀博信氏と戸澤文広氏をお招きし、ブラインドサッカーについての講演を聞いた。

NPO 法人セカンドサポートではさまざまな事業を行っているが、パラスポーツ、特にブラインドサッカーの推進に力を入れており、その一つに北海道初のブラインドサッカーチーム「ナマーラ北海道」の運営がある。セカンドサポートの理事長であり、コンサドーレ札幌アドバイザースタッフである芳賀博信氏と、ナマーラ北海道のフィールドプレイヤーであり視覚障害を持つ戸澤文広氏に、それぞれの立場から講演していただいた。

ブラインドサッカーの様子をDVDで見せていただいたあと、芳賀氏からセカンドサポートやナマーラ北海道を立ち上げた経緯や、健常者と障がい者をつなぐ一定の工夫についてお





話をいただいた。このあとの実技研修でも、芳賀氏からは「あとちょっとじゃわからないよ、何歩？何cm？」「指示をするガイドは、声を出し続けないと、視覚障害を持つ方はガイドの近くに来たのかわからないよ」などと、具体的に両者をつなぐ一定の工夫について説明して下さった。

また、戸澤氏からは、視覚障害が進み学生時代続けられなくなったサッカーをまた行える喜びや、健常者と同じように接してくれるナマラ北海道に関わる方の温かさや、このチームを子どもたちに残したいという強い思いを聞くことができた。また、実際に芳賀氏が、自然と、さりげなく、戸澤氏に気遣う（気遣うという感覚ではないのかもしれないが）様子を見ることができ、大変勉強になる講演会となった。

2. 第2分科会 コミュニケーション

スクールカウンセラーの中野ひろみ氏に、「今から使える！教育相談の極意～児童生徒との関わり方や保護者とのコミュニケーションについて～」と題して講演していただいた。

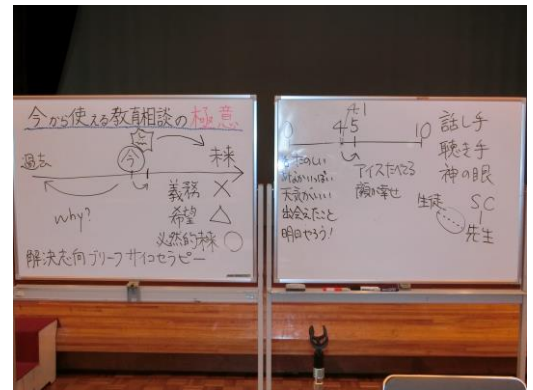
効果的な対応に必要なもの

① リソース（資源）

リソースとは、資源のことであり、誰でもリソースを持っている。問題でも裏を返すと資源になり、持っている力を積極的に探し、フィードバックすることが大切である。

例えば、「友達がいない」と悩む生徒に対して、その中でも仲の良い生徒が聞き出せた時、「友達がいないと言っていたけれど、1人だけいるんだね。友達をつくれる力があるじゃない！」など。

発達障害のこだわりであっても、使い方によっては資源になるものである。



② 解決像について考えること

本人が、この先どうなれば問題解決につながると考えるのかを、直接本人に訊いてみることも大切である。できるだけ早い段階でイメージを持つことができると良い。

③ アクション

解決像がしっかりとできれば、動くことができる。「～ねばならない」や「～した方がいいんでしょ」と考える場合は、実現することが少ないが、「～していると思う」と、イメージを自分自身で明確に持つことができれば、実現できる場合が多い。

少しずつでも、行動の変化を積み重ねた経験によって、性格の変化につながっていく。

以上の3点を踏まえ、気軽に取り組める技法として、「スケーリングクエスション」について理解を深めた。

「スケーリングクエスチョン」

感情(辛い、苦しい、登校できない)など、観察しにくいものを、相対的に観察可能な尺度に置き換え、相手と自分が共通認識できるようにするものである。スケーリングクエスチョンでは、既にできていることを見つけ、それを伸ばしていけるような質問を行う。

1. 「最高を10、最悪を0とすると、今はいくつくらいですか？」
何についての尺度を表すのかは、今のその人に合ったものを提示する。
全体的な調子、不安、達成度など。この際、マイナスの解答でも受け入れる。
2. 「0ではなく、それを3に押し上げているいいことって何？」
できていないことは、訊くだけで意欲を低下させてしまうため、できていることを引き出していく。もし、0と答えた場合は、「そんなに大変なのに、今日までどうやって生き延びてきたの？」と質問する。
3. 「もし、3が4になった時、あなたは何をしている？」
「上げるにはどうすればいい?」「何が必要?」ではなく、上がった時の自分を想像させる。義務や希望ではなく、「~になっているだろう」という必然的未来を想像できた場合は、実現させられる状態のことが多い。

3. 講演会の成果

参加者からは、「自分が知らない情報を教えていただき勉強になる」「ワークショップに取り組むことで、自分自身もプラスな気持ちになれた」「今後の教育活動に役立ちそう」という声を多く聞くことができた。

気軽に取り組める実践的な内容を学ぶことによって、それぞれの先生が抱える学校・学級の問題に前向きに向き合うことができ、今後子どもたちに還元していくことが望める講演会となった。

IV. 部会研究の成果と課題

1. 成果

新しい2年次計画がスタートした1年であったが、最初の1年次を無事に終えることができた。第1分科会では、講演と実技講習、第2分科会では、今年度は講演を中心に行うことで、次年度のレポート交流につなげるための取組を行うことができたと考えている。

2. 課題

児童生徒への還元についてどのように行っていくか、ということがあげられる。協議会の中では、コミュニケーションにかかわる知識を得ることができた。しかし、学校に戻った時にどのように還元するかということについては、時間や場所、予算など多くの困難がある。

次年度は、今年度の経験を踏まえた実践報告としてレポートを提出してもらおう。多くのレポートを提出していただき、実践を共有することで、今後の活動に生かしていく必要があると考えている。

(文責 武田 詩織)